

# マन्दール川の水汲み屋

ムハンマド・リドワン・アリムディン



水汲み屋がマन्दール川を進む（筆者撮影）

その女たちは毎日、夜明け前の二時半から活動を開始する。何十もの空のポリタンクを担いで三〜四キロの道のりを歩き、マन्दール川（Gangai Mandar）（注①）の海水があまり入っていない川辺を目指す。朝の冷たい空気に耐え、体をずぶ濡れにしながら、上流へ向かう。彼女たちのしなやかな手は疲れを知らず、持参した何十ものポリタンクに次々と淡水を入れていく。

住民の使う水は水道公社の水に頼るのではなく、この村の女性たちの頑張りによっているのである。

水の入ったポリタンクの重みで体をマन्दール川に浸けながら、塩辛い水の川の蛇行に沿って、河口へと向かう。夜明け前、彼女らは淡水を汲み、早朝にそれを集落へ運び、昼、夕方、夜まで住民の家々へ届けるのである。

## ●水道公社はあったの…

今から約一五年前、西スラウエシ州ティナンブン（Tirahbung）郡（注②）にも水道公社ができた。「自分たちもきれいな水の設備が整って、近代化の恩恵を受けられ

る」と住民の目には映った。それ以前から、住民はマन्दール川を水源として大切にし、川で水浴をしたり、水を汲んだりしてきた。

マन्दール川の河口から約一〇キロ離れたレンバン・レンバン村に、水道公社の水源が設けられている。たしかに水源はマन्दール川からだが、ろ過している。最初はよかったのだが、何年か経つにつれて、家庭に供給される水はとも水道公社の水とは言いがなくなった。水が塩辛いのだ。

水道公社ができる前もできた後も、ティナンブン郡の郡庁所在地の住民の多くは、ワイ・サウツ（Wai Saung）という名の飲み用水の淡水を用意する人々の仕事に頼ってきた。ワイ・サウツとはマन्दール語で「汲まれた水」という意味である。

マन्दール川の河口付近（海から一〜二キロ上流）の水質は悪く、泥を沈殿させるためにミョウバンを加え、殺菌のために塩素を使わなければ、飲用には適さない。

## ●水汲み屋の仕事

ワイ・サウツはマन्दール川の河口から三〜四キロ上ったレコパデイス村の川沿い

で採取する。水源はといえば、川砂の上に掘った小さな井戸である。

井戸の直径は約五〇センチメートル、深さは六〇センチメートルである。パッサウツ・ワイ（Passau Wai）と呼ばれる水汲み屋たちは、ここに着くと、毎回その井戸を作る。そして、作った井戸が壊れないように、彼らはプラスチック製のドラム缶の破片を活用する。プラスチック製のドラム缶の底には目の細かい網が取り付けられ、砂が入るのを防いでいる。

しばらく待って、濁っていた水が澄んでくると、ようやく水汲みの仕事が始まる。「ビモリ」（Biriholi）（注③）のポリタンクへ水を汲むために使われる主な道具は、ピサウツ（Pisau）と呼ばれるプラスチック製のバケツと、チャロロツ（Calolot）と呼ばれるロートのような上部が幅広の管のような器具である。

ポリタンクに水を汲む作業は、持つてきた何十ものポリタンクすべてに汲み終わるまで、休むことなく続く。水を汲み終えたポリタンクの口にはプラスチックのふたをし、ゴムで縛る。その後、ポリタンクは川



水汲み屋が掘った水源の「井戸」(筆者撮影)

へ運ばれ、紐で括って他のポリタンクと一緒に束ねられる。束ねられたポリタンクは小舟(sampan)などで運ばれていく。

作業が終わると、水汲み屋は、冷たい水の中を川の流れに身を任せ、水面下で揺れるポリタンクを運びながら、自分の集落へと戻っていく。

集落に着くと、水汲み屋は水の入ったポリタンクを家々に運んでいき、各家に水が届けられる。しかし、水汲み屋の仕事はこれで終わりではない。あらかじめ注文が入っていたら、注文した家へポリタンクを運ばなければならない。

たぐさんのポリタンクを運ぶために、特別に工夫された手押し車やバイクを使う者もいる。とくに、遠く離れた客のところへポリタンクを運ぶためには、特製のバイクが使われる。

ティナンブン市場付近でのポリタンク一個分の水の値段は、一〇リッター入りで五〇〇ルピア(約七円)、五リッター入りで二五〇ルピア(約三〜四円)である。この値段には、手押し車などでの運搬料も含まれている。

## ●水汲み屋のカマツ・アンビコ家

水汲み屋を営む家族の一つに、マンダール川沿いに住むカマツ・アンビコ氏の家族がいる。以前、一家の主であるカマツ・アンビコ氏は漁師だった。年をとったので、

もう漁には出なくなったが、長男だけは今も漁に出かけている。

妻、婿・嫁、子どもたちに至るまで、長男を除いた家族全員が淡水を用意するこの仕事に関わっている。毎日、アウトリガー(注4)の付いた小舟にポリタンクをいっぱい載せて、カマツ・アンビコ氏は妻子をレコパデイス村へ連れて行く。婿の小舟のほうがもう少し近代的で、小さいエンジンが付いている。カマツ・アンビコ氏が出かけられないときにも、妻や子どもたちが自分たちで小舟を漕いで、淡水を取る場所へ出かけていく。

注文があるときは、カマツ・アンビコ氏の娘たちが水の運び屋としての役目を果たす。水の注文者と運び屋とは昔からのずっと親しい間柄である。注文者は、家の前にポリタンクが到着すると、それを持ってすぐさま家へ上り(ティナンブンの家は一般に高床式である)、台所へ運ぶ。ポリタンクの水はすぐに、素焼きの水桶であるグシ(ghis)やプラスチック製のドラム缶に入られる。飲み水や調理用を使う場合、ポリタンク一〇個でだいたい二〜三日分の水の量になる。

カマツ・アンビコ家のようなサービスを提供する家族は多い。とくにマンダール川沿いから遠くないところでは各村、各集落にそうした家族がいる。水汲み場へ小舟を使って行き来する者もあれば、徒歩で水汲み場へ向かい、帰りはずぶ濡れになって

水を運ぶ者もいる。

## ●塩分濃度の高い水

乾季になると、水汲み屋の数が急に増える。マンダール川の河口付近の塩分濃度がとても高いからである。とくに満潮のときには一層そうなのだが、海水が容易に川の上流へ向けて入り込むのである。

塩分濃度が高いために、川から直接水道管をひいている家では、水浴や洗濯に塩水を使わざるを得なくなる。実際、かつて水道公社が満足できるような水供給をしなくなった後、たぐさんの家庭が独自に一〜二台の揚水ポンプを設置して、水源から自分の家まで数十メートルの水道管をひいたのである。水道管の端にはフィルターが付けれられ、それが川面に突っ込まれている。このため、マンダール川沿いを歩くと、何百もの水道管が堀の上から川面に差し込まれているという、実に面白い光景を目にすることができ。

このため、水道管にせよ井戸にせよ、水源を持つているにもかかわらず、ティナンブン郡およびその周辺のほぼすべての家庭では、飲料水については、水汲み屋の世話になっているといつてよい。他方、川から直接ひいたり井戸から得た水は洗濯用や水浴用に使う。ある調査によると、ティナンブンの地下水は飲み水に適さないとのことであり、水汲み屋への依存が高くなるのもっともな話である。



水の入ったポリタンクが川面に浮かぶ（筆者撮影）

## ●水汲み屋―自立した住民の対応

こうした「手作業」で毎日一体何立方メートルの水が用意されるのか、想像してみればよい。水汲みの仕事には勤勉さが求められる、勤務時間など決まっていない。しかし、ずぶ濡れになるけれども、実はなかなか実入りのいい仕事なのである。この仕事の水汲み屋やその家族に利益をもたらす。一方、何百もの家、何千人もの住民にとって水はまさしく必需品だ。これは格好のビジネス・チャンスではないか。

考えてみるに、住民が自立する能力を持つているならば、政府の役割は最小限で済むはずである。この点で、ティナンブン郡の住民のために水汲み屋が水を提供するという話は、なかなか興味深い事例である。浄水供給という点で、国家あるいは政府の役割はないに等しいにもかかわらず、住民は、水という生存に不可欠な基本必需品の不足を嘆いてはいない。たとえ、それが乾季であったとしても、である。

(Muhammed Rakiwan Alimudin / マンダール文化研究家)

（注1）川の名前でもある「マングラール」とは、スラウエシ島南部一帯の、とくに海岸部に居住するエスニック・グループの名前である。マングラール族はマングラール語を使用する。航海術に長けているとされ、識者のなかには、海洋民族としてブギス・

マカッサル族と称される人々のかなりの部分は、実はマングラール族ではないかとの見方もある。

（注2）西スラウエシ州は二〇〇四年一〇月に南スラウエシ州から分立してできた新しい州で、州都はマムジュ。ティナンブン郡は同州のボレワリ・マングラール県にあるが、ティナンブン郡を中心に、同県から分立して「バラニバ県」を新設しようとする動きがある。なお、二〇〇七年一月のアダムエア機が消息不明になった事故では、この地域が捜査にあたって重要視された。

（注3）インドネシアの食用油のトップ・ブランドの一つ。原料はパーム油である。食用油を使い終わった後のポリタンクが水汲み用に流用されているのである。

（注4）舟の脇に張り出された支柱。マングラール地方のアウトリガーは一般に小舟の両脇に付けられているが、場所によっては片側だけに付いているものもある。

### 《訳者による解説》

筆者のムハンマド・リドゥワン・アリム・デインは、西スラウエシ州として南スラウエシ州から分立したマングラール地方の地域文化の掘り起こしと振興に努める青年である。

彼は『トゥルック・マングラール』(Turuk Manguar, 「マングラール湾」の意味) という月刊誌を一人で編集し、パソコン出力の原稿をプリンターでカラー印刷して、関係者

に販売している。また、漁村社会や漁業・船舶に関する見識が豊富で、とくに、エンジンなしの帆船としては世界最高速といわれているマングラール地方の伝統帆船サンデック(Sandek)の復興、および毎年八月に西スラウエシ州と南スラウエシ州を舞台に開催されるサンデック・レースの準備・運営にも積極的に携わっている。彼は『パニクル』へ投稿する常連の一人で、写真の腕前もなかなかで、フォト・エッセイも多い。

水は、人間が生きていくうえで必要不可欠なものである。浄水への住民アクセスの向上は、開発途上国における社会開発や貧困対策での最重要課題の一つである。

二〇〇一年から地方分権化を実施しているインドネシアにおいても、地方政府による住民サービスの向上や生活基盤となる社会インフラの整備は常に大きな問題となっており、村落水道をはじめとする浄水インフラの整備もその一つである。しかし、本稿で述べられているように、水道公社が設立されても、それが十分に機能していないケースは少なくない。水道公社は県・市政府が所有・経営するが、その多くが深刻な経営難に直面しており、民営化や民間企業との合弁が頻繁に話題に上ってくる。

本稿の舞台となっているマングラール川周辺も、政府による水道供給が実現できない場所の一つである。しかし、住民は政府に不満を申し述べたり、抗議デモを起こした





水の入ったポリタンクを出迎える住民  
(筆者撮影)

りはしていない。昔と同じように、水汲み屋の存在を通じて、住民内部で水の問題へそれなりに対応してきた。政府の住民サービスはあくまでも付加的なもので、それが機能しなければ自分たちで対応すればよいと考えているようにみえる。

そこには住民による政府への信頼の欠如という問題が横たわっており、行政と住民との距離が遠いと感じられる。住民にとって、あってもなくてもあまり変わりがないと感じる住民サービスへのニーズは少ない。加えて、この水道公社の失敗が教訓となり、住民サービスを提供しようとする政府への対応がよりシニカルになってくるはずである。この点で、住民と近いはずの地方政府も、住民からは外国援助機関と同じ「ヨソ者」として扱われることになる。

公共水道が整備されていないために、住民が自ら対応している事例は、あちこちにある。というよりも、そうした事例のほうがインドネシア東部地域では大半だと言っても過言ではない。

たとえば、以前、記者がサンゴ礁に囲まれた離島地域を訪問したときにも、ポリタンクを多数運ぶ水汲み屋に出会った。水汲み屋は、毎朝、集落の各家庭から空のポリタンクを預かり、車や船で水源のある場所や島に行つてポリタンクに水を入れ、集落へ持ち帰り、各家庭に配達する。外国援助によって海水淡水化装置が設置された島もあったが、コストが高いのと住民による設

備管理がうまくいかなかったため、結局、水汲み屋への依存に戻った事例もある。

マカッサルのような大都市では、浄水供給に関する水道公社への不満が、連日のように地元新聞の投書欄を賑わせている。雨季と乾季との降雨量の違いの大きい当地では、乾季に半日単位の計画断水となるのは日常茶飯事で、外国人が住居を探す際の重要ポイントの一つは、井戸の有無となる。

二〇〇六年九月にマカッサルへ赴任した記者が最初に購入したものの一つは、プラスチック製の大きな水桶であった。井戸のない我が家では、水道の水が来ている間に水桶に水を溜めるのが日課となった。

地域によっては、何の連絡もなく突然、水道公社からの給水が何週間も止められるところもある。このため、人口一〇〇万人を超える、インドネシア東部地域で一番の近代都市、マカッサルでも、リヤカーにポリタンクやドラム缶を載せて水売り歩く「水屋」が、大活躍するのである。

それにしても、水汲み屋にとって、ポリタンクという軽くて丈夫な素材の登場は、水汲み仕事のつらさを十分に軽減しているのではないかと思う。新素材の活用で、水汲みという伝統的な「手作業」の身体的負担が軽減され、より進んだ近代の象徴と目される水道公社による浄水供給の挫折を結果的に補っているのは、皮肉である。

往々にして、外国援助機関は、「先進国で標準とされるような、都市生活者と同様

のインフラやサービスを彼らに提供しても、それが先進国で標準とされるような維持管理能力によって適用されなければ、問題は解決しない」と考える。こうした信念に基づき、外国援助機関は、能力向上のための教育訓練や研修を提供し、それでも改善されなければ、相手国の能力不足やガバナンスの不備が原因であると批判して、さらなる能力向上のための教育訓練や研修を提供しようとする。教育訓練や研修が行われれば、それだけ外国援助が継続されるので、相手国には、一刻も早く能力向上を目指すモチベーションが働かなくなってくる。

それは、浄水の確保が日々の暮らしに直結する住民からは遠いところでの話である。開発途上国の現場における基本的な住民サービスの大半は、むしろ、マンダール川の水汲み屋のような、住民自身の工夫とイニシアティブによって、それなりに住民間で融通されているのであろう。それは最良ではないかもしれないが、現時点で最適となっている理由が現場にあるはずである。

いつの日か、住民が納得するような形で村落水道が設置・維持管理される日が来るまで、マンダール川の水汲み屋は、朝早くから毎日、何十ものポリタンクを担いで、家々に水を運び続けることだろう。

(まつい かずひさ／在マカッサル海外調査員)